

# 本校の現状を語る

現校長 飯野竹二郎

声高の現状を一口にしていうならば、終戦当時の無から出発し、苦難を克服して、ともかく一応必要な施設も整備され、学園の諸活動も充実して活発な動きを見せ、若人らしい純真明朗さをもつて、品位ある風格を備えるに至ったといえるだろう。もちろん是正すべき短所がないわけではなく、拡充すべき諸施設も多く残されているが、これは今後の努力にまつより外ない。

## 一、学校の規模について

現在生徒定員一千五百名、三十学級という規模は、高校教育を望ましく運営し得る極限であろう。もちろん府県によって、これより多い定員の学校が若干あるが、どうも経営がやりにくいということである。東京都はすべて定員一千二百名を限度とし、校数をふやすことにより、志願増加に応じているようであるが、うらやましいことである。

教職員は、校長の外教員五十六名、事務職員八名、実習助手から傭人まで専任十名、計七十五名であるが、これは文部省の基準を下廻るもので、支障が少くないから、やむを得ず育友会の援助により、必要な部署に、若干の人員を増加している。

## 二、施設について

校地総面積七千二百坪弱は、基準に對しはるかに不足するものであるが、都会地の学校としては辛抱せねばなるまい。それに運動場として四千八百余坪を持つことが出来たのは、満足すべきである。

教室は普通教室、特別教室を合せて三十七教室、研究準備室六室、基準の四十五教室に足らぬが、敷地の狭隘に制約せられるので、せめて四十一教室を持ちたいと思ひ、四教室の増築を要請中である。

新教育の要請たる図書館、家庭科諸教室等は、他校に先んじて建築したので、いずれも広く県内外の視察対象となつて、参考資料を提供して来たのであるが、その後続々と立派なもの出現を見つづけることは、嬉しくまたうらやましい次第である。

ある。

講堂はジェン台風による被害を機縁として、新改装を行い、時代の風尚に適するようにしたが、何分にも狭く、全生徒を収容することが出来ないで、かたがた体育館の新築はこの点からも、急務中の急務である。その他プールなど欲しい施設は多々あり、これに伴ひ敷地拡張問題についての構想など、書きたいことはあるが省略する。とにかく地価が高く、収容人員の多い都会地の本校として、将来考究せねばならぬ問題は狭小の校地内で、いかにしたら効率の高い施設を増設出来るかという点である。

## 三、生徒について

声屋という土地柄から来る、家庭環境のためか、生徒は一般に純真で、都会ずれがしておらず、率直明朗で、上品であるのが嬉しい。修学旅行や、運動部の遠征などで、行く先々の旅館等から、他校とまるで違ふという、こうした好評を受けていることを、報告して置く。しかしその反面、根気強さ、ねばり強さといったような、バックボーンとして大切な強靱さに欠けていることや、都会通有の利己的、打算的な面も、多少見受けられるので、これはぜひ改めたいものと思つている。

体位については、都会地の傾向通り、男女とも身長は全国、全県平均をずっと上廻っているにかかわらず、体重が同じ位で、ある年齢層では下廻っている。しかし諸疾患が極めて僅少なことは喜ぶべきである。

## 四、教職員について

教職員の平均年齢は比較的若く、しかも三十歳以上四十歳台が三分の二以上を占めていることは、経験を積んだ働き盛りの者が多いということであり、学歴面から見ても大学出三十二名、高師出十四名その他という陣容で、いずれも入念な調査の上、採用した者ばかりだから、欲をいえばきりがないが、まず自信ある組織といえる。

殊に好ましいことは、これら教職員諸君が研究心旺盛で、はつらつとして元氣旺盛、明朗率直に意見を開陳し、相互の切磋琢磨や学園の向上に熱意を寄せ合つていふという氣風である。これは何より嬉しく有難いことで、いろいろの行事や、研究会において、自発的なものとして露呈される風景は、他校に對し誇り得べき特徴と、ひそかに思つている。

## 五、生徒活動について

文化面においては、二十二部がそれぞれ活発にして着実なクラブ活動を展開させている。中でも弁論部やE.S.S.は、男

女とも各地の大会において優勝を勝ち得たり、優秀な成績を収めている。また美術部ではかつて牧野詠子が、二年連続六枚二科展入選と、大いに気を吐いたのをはじめ、各種美術展に特選、入選の榮譽を荷った者も少なくない。部の性格上、そうした機会を持ち得ぬ部員も、それぞれ地味に着実な研究業績をあげつつ、楽しんでゐることは、誠にたのしいことである。

運動部にあつては硬式野球部の活躍が特にめざましく、朝日新聞主催全国大会に出場六回、うち昭和二十七年には全国優勝の栄冠を獲得し、毎日新聞主催の全国選抜大会に出場三回、一度は決勝戦にまでこぎつけて、惜しくも優勝を逸し、国体に出場三回、うち二回は準優勝。その他近畿大会に二回優勝するなど立派な戦績をあげている。

サッカー部は、近畿大会に優勝二回、国体にも参加、西日本大会に準優勝の戦績をあげている。ラグビー部は近畿大会優勝、国体出場。軟式野球部は県下大会優勝三回、近畿大会優勝二回、国体出場一回の戦績を残し、卓球部は県下大会優勝、西日本大会第三位、全国ベスト・エイトに入る戦績をあげ、硬式庭球部は、全国高校選手権大会に準優勝、川廷選手が少年ランキングにランクされたり、軟式庭球部では、全日本大会に出場三回、西日本大会に出場二回、山岳部は、県下大会に優勝四回、国体に連続出場という業績をあげ、拳闘部は、フライ級全国二位、バンタム級県下大会優勝、水泳部の国体出場など、それぞれ立派な活躍を示している。以上は県下大会優勝以上の戦績のみ、列挙したのであるが、地区その他の大会成績を数えればきりがなく、各部とも何れもすぐれた活躍をしている。去る昭和二十六年秋などは、県代表権を得て国体出場が五部、四十数名という大世帯となり、派遣費調達に嬉しい悲鳴をあげたことなど、懐かしい思い出である。

ここで私の特に推賞したいことは、野球部をはじめ、各選手とも、学生スポーツマンとしての、マナーの立派なことである。これについては各方面から、しばしば賛辞を頂戴しており、これは勝敗より更に大切なことで、学校としても、部員諸君の自覚と、平素の共励によって、ますます立派なマナーを習慣づけるよう希望する。

## 六、進学就職について

両方面とも年毎にきびしく、狭き門となつて行きつつあることは、生徒本人、家族の方はもとより、学校としても心痛の種である。

進学については、大学の受入れ員数に数倍、十数倍する志願者が殺到し、しかも有名大学といわれるものほど、浪人組の

進出がめざましく、新卒業生の席は年々ふさがれて行く。これについては、大学側の入試方法にも検討すべき問題があると思うが、今後この傾向は、ますます激化すると見ねばなるまい。

本校における最近三ヶ年の大学入学者平均は二三五名(二一六名→二六四名→二二四名)で、苛烈さが年毎に加わることや、また浪人覚悟で、自己の力以上の学校志願者漸増の点等から考察し、この数字は低下より、むしろ上向き傾向と思う。ただし、国公立入学者が漸減し、私立の有名校がだんだん困難になりつつあることは、大いに警戒せねばならぬ。とにかく我々としては、甘い考えを捨て、現状に満足せず、十分の戒心をもって努力せねばならない。

就職問題については、従前希望者が極めて少く、常に百パーセントの就職を見ていたので、学校としてはこの方面に、関心が薄かったくらいがあった。しかし希望者が漸増するにつれ、就職斡旋機構を整備する必要を感じ、三年前から就職指導主任一名の外、二名の係員を配置し、求人開拓に全力を傾注して来た。その努力が功を奏して、今では求人申込者も多く、一流会社、銀行方面に採用される者も増加し、就職率も他校に比し良好といえる。殊に嬉しいことは、受入先でも評判が一般によく、一度採用した会社が、本年もぜひといつて来る向が、増加しつつあることである。どうか就職している諸君には後進に道を開くため、せっかく自重勉勵してもらいたく希望する。

以上本校の現状について、大要を述べたのであるが、自分として将来に対する構想がないわけでもない。しかしこれは衆議を尽くして策定すべき性質のものであるから、ここには割愛する。

この現状を喜ぶにつけ、よくもこれまで育てあげて下さつた、各方面の諸恩恵に対し、心からの感謝を捧げる。